

1992年10月1日、北海道大学→神戸大学。

「『発達科学部』という新しい学部ができる。来ないか？」

「行きたい！ 『人間発達の社会学』を作りたい」

以来、29年＋半年。

I. 前史：北大時代（1980年代～1992年）の研究

①秋田県の出稼農民の調査研究：

都市と農村、労働者と農民、地域間・階級間移動に伴う主体形成（人間発達）と社会変革。

BUT 「村社会・身近な社会関係」の変化は見えても、「日本社会」変革の論理・展望は見えず悩む。

②労働者（炭鉱・自動車・縫製・食品加工等）の調査研究

労働－生活を通じた主体形成と社会変革。

「職場社会・身近な社会関係」の変化は見えても、「日本社会」変革の論理・展望は見えず。

BUT 気づいたこと：日本の労働者＝多くが「出稼類似体験」（農村出身→都市就労）。

⇒ 労働者の労働や生活、社会関係や意識に多大な影響。

∴ 戦後高度経済成長期の「労働力流動化政策」（農村→都市）。

（戦前：「出稼ぎ型賃労働」論）

欧米：既に1950年代高度経済成長期から、多国籍企業化・移民労働者受入。

日本：一国内の労働力流動化（移民受け入れず）、低賃金労働力を確保、
輸出主導型高度経済成長を遂げた、当時としては唯一の「先進」国。

（後に東アジア諸国が続く）

＝日本社会の個性 & 戦後に構築された「単一民族神話」の基盤。

& 1980年代末、輸出主導型の資本蓄積構造は限界。

多国籍企業化・外国人労働者受け入れが開始。

「日本社会」変革の論理が見えなかったのは、一国単位の変革しか想定していなかったから！

（＝社会変革の論理はグローバルな視野の中でこそ。

日本社会の一国的変革はありえない！）

→1) マルクスのアイルランド人出稼ぎ・移民問題、レーニンの出稼ぎ農民論。

（一国単位→世界資本主義。自説を転換）。直観は確信に。

2) 外国人技能実習生（研修生）、日本語学校生（就学生）の調査に着手。

「国際的・地域的移動に伴う人間発達・社会変革」を研究：

「新たに発足する発達科学部にピッタリでは？」とお声がけ。

II. 神戸大学（1992年～）での研究：5つの柱

①多様な移民・外国人労働者の調査研究

技能実習生、日本語学校生（就学生）、留学生、華僑、日系ブラジル人、ベトナム難民etc.

「移動・労働・生活を通じた人間発達→グローバルな社会変革に多様な形で連鎖」を実感。
やはり「日本」という一国単位の社会変革路線への視野狭窄が桎梏！。一層、確信に。

& I. ウォーラーステインの世界システム論を知る。何度もゼミ。一層、確信が補強。

②戦後日本の特質（単一民族神話・輸出主導型経済成長）

=世界資本主義システム内での日本の相対的位置に由来。（≠日本国内の一国的要因）

戦後日本の左派・右派双方のナショナリズム、家族・学校教育・地域・労使関係etc.を通底・規定。

& 東アジア社会の特徴・社会変動論（日本の後を追い、労働力流動化、輸出主導型高度経済成長・
「世界の工場」。欧米との差）

③∴ 真の社会変革=世界資本主義システムそれ自体の超克（脱近代）。

& そのためには、近代社会で最後まで維持される3つの差別・分断の境界線・「壁」を克服する必要。

1)国籍（国境）、2)階級、3)能力（メリトクラシー）。

移民・外国人労働者の調査研究（～2000年）：1)国籍、2)階級の「壁」の批判的な越え方は把握可能。

BUT 「能力」の壁の越え方は不可視。∴ 移民・外国人労働者：高い「能力」の保持者。

④∴ 3つの最終的な壁を越えようとしている典型的主体は？（著書・論文は2006年、調査は2000年頃～）

研究対象をシフト。

中国残留日本人（能力ではなく、血統で国境・国籍・階級を批判してきた人々）、

夜間中学生（無国籍を含む多国籍、能力主義・メリトクラシー・階級の被害者）

⑤主体形成（人間発達）を、より俯瞰的・根底的（ラディカル）に捉えるための方法論・認知枠。

発達科学、発達環境学研究、人間環境学。自然と社会（「主体形成・能力」、「生命－生活（阪神・
淡路大震災）」観、社会構築主義批判、エコロジー、ポスト・ヒトゲノム等）

人間が生きるために必要な協働関係としての脱領域的・グローバルな「地域社会」。

=「ポストコロニアルのサバルタン研究」（ギルロイ、チャタジー等）を知る。何度か、ゼミ。

模索は、あまり的外れではなかったと確信。

& 先端科学技術（ヒトゲノム介入、AI、サイボーグ化etc.）のもつ「生産力=破壊力」のもつ意味。

人類の終焉、ポスト・ホモサピエンス化という「もう一つの未来」の可能性。

表1 著書・論文数（概数）

		出稼ぎ 農民	労働者・ 階級構造	移民・ 外国人	国民国家 東アジア	人間発達 環境	中国残留 日本人	夜間 中学生	地域 その他
北大	1982～1992年	<u>6</u>	<u>1 2</u>	3	—	—	—	—	—
神大	1992～2005年	1	—	<u>2 5</u>	<u>6</u>	<u>1 2</u>	—	—	4
	2006～2012年	1	2	6	2	4	<u>1 9</u>	1	2
	2013～2022年	—	—	—	1	4	<u>1 0</u>	<u>7</u>	5

Ⅲ. 神戸大学での教育

①学部・全学共通科目の講義：「大きな反省」。

担当授業科目名は時期により変化。BUT 内容はほぼ一貫。

1) 移民・外国人労働者論、2) 世界・日本社会構造変動論、3) 人間発達・人間環境論。

自身の問題意識・研究成果をふまえ、それなりに「おもしろい内容」は学生に伝えたとの自画自賛。

教科書作成、配布資料、パワーポイント、リアクション・ペーパー活用等、一般的な工夫も実施。

BUT 基本的には、「一方的に伝える授業」の枠内。

学生が衝撃をもって自ら問題意識を喚起するような講義はできず。

②学部・大学院のゼミ：「小さな反省」。

ディスカッションは重視。学生・院生の研究（卒論・修論・博論）に必要なテーマ・テキストで実施。

「深く／柔軟・多角的に考える訓練」も一定程度、できた。

BUT それも含め、結局は、私自身が「学びたい」テーマ／「身につけたい」能力の鍛練がメイン。

一人ひとりの学生の生活やそこでの課題解決に寄り添ったテーマの考察・配慮は不十分。

③卒論・修論・博論：あまり後悔なし。

指導原則：1) 自分が好きなことをする、 2) 手を抜かない、

3) オリジナリティ重視（≠小綺麗な既知の整理）

博論・修論を含め、多種多様なテーマ（自分が好きなこと）。

学部卒論を含めほぼすべて、（多少の手直しをすれば）社会学会で発表できるレベルに到達。（手を抜かず、オリジナリティあり）。

表 卒論・修論・博士論文のテーマ（概数）

	卒論	修論	博論
残留日本人・帰国者	—	6	1
エスニシティ・外国人	11	11	3
出稼ぎ農民	—	2	1
福祉・医療・生命	7	4	2
ボランティア・社会運動	3	2	1
理論	2	1	1
国家・国際化・平和	9	3	—
地域社会・環境・動物	6	1	—
文化・芸術	15	5	—
教育・少年・若者	11	2	—
「食」	5	—	—
ジェンダー・性・家族	11	—	—
文学・歴史	7	—	—
情報・インターネット	4	—	—
宗教・科学・学問	6	—	—

IV. 神戸大学での研究・教育の自己評価

①研究：元々の資質・能力の欠如。 ×：頭脳明晰・博覧強記・語学堪能。

BUT それとの比較では、5～10倍の研究業績。

∴ 多くの人々に支えられたお陰（＝ここ1年位の本音）

1) マルクス。大学生（高校生）時代に出会い、院生時代から何度か『全集』通読。

学生・院生・教員として、数え切れない回数のゼミ。

a) 物事を徹底的に深く考える思考方法

b) 「天才の肩の上に乗って初めて見ることができる景色」を実感。

2) 布施鉄治（指導教員）。

a) 調査の心構えと方法。（調査能力なければ、研究者にはなれず）。

b) 大らかな北大的学風。（×：頭脳明晰・博覧強記・語学堪能）。

BUT それでもいいのだ！、細かいことにこだわるな、流行を追うな。辺境だからこそ見える世界がある。辺境だからこそ成長できる。辺境こそ世界を変える。楽観主義。

3) 発達科学部、とりわけ社会環境論の同僚。

a) 広義の「社会変革の『志』・問題意識」を共有。（≠特定の政治的立場）

＝既存アカデミズム・近代諸科学を前提とした知的イノベーションに満足せず、ラディカルな知的リボリューションを志向。

＝「通常科学（クーン）」の枠内での地位・業績の確保ではなく、より根底的なパラダイム転換。（パラダイム転換の能力の有無は、別問題）。

知的パラダイム転換には、既存のアカデミズムを構築している現実の「社会変革」が不可欠。

＝自らの競争的業績のためではない、たとえ業績としては全く評価されなくても、世のため人のために必要な研究を！。

b) 狭義の「社会学」（＝近代諸科学・専門性）に縛られない「社会環境論」。

「社会学」：比較的、自由度の高いディシプリン。（社会学者はしばしば強調。変動期の社会科学）

ex) サッカー・恋愛の経済学・法律学・政治学に比べ、社会学：サッカー・恋愛に関心（好き・嫌い）ある人にとって、「本当に大事なこと／知りたいこと」を自由に研究。

BUT 近代社会の中で、経済学・法律学・政治学と区分された近代諸科学・「通常科学」としての「社会学」も成立。＝視野・方法の近代主義的な制約・限界。

ex) 「それは『社会学』にならない／『社会学』ではない」etc. 制約も。

「社会学」：経済学・政治学と並び立つ近代的な専門性？、

or 経済・政治・歴史・思想・心理等を包括する「社会の学」？、

浅野：元々、後者の立場。BUT 社会環境論＝それを一層、促進、確信に。

「（狭義の）社会学」から脱皮しなければ、主体形成－社会変革の道筋は見えない。

＝逆に、社会学界での一定のオリジナリティの発揮・評価にもつながる。

* 人間環境学科・発達科学部も、多様な知的刺激。

人間環境学科：自然と社会：エコロジー、ポスト・ヒトゲノム、安全指標等。

発達科学部：主体形成、身体論・心理学・教育学。

共同研究の取り組み：研究深化・視野拡大の重要な契機。

BUT 浅野の在籍中：「学際」研究（「通常科学」としてのそれぞれの専門性を尊重した上で、それらを複合する近代諸科学）の域を出ることは困難。＝浅野の力不足。

4) 学生・院生（ゼミ、卒論・修論・博論）＝広義の共同研究者。

a) 浅野の研究に直接、関わる領域：「指導」を通して認識深化・研究進展。

ex) 華僑、ベトナム難民・介護労働者、ブラジル人労働者、技能実習生、日本語学校生、中国残留日本人（二世・三世含む）、

世界システム論、ナショナリズム、国民国家、エスニシティ、能力（潜在能力）、生命・生活、地域社会、人間発達環境etc.

b) 自分では取り組まなかったであろう多様な研究領域。

ex) ボランティア・社会運動、戦争・平和、動物、文化・芸術、教育・少年・若者、「食」、ジェンダー・性・家族、文学・歴史、情報・インターネット、宗教・科学・学問。

視野を拡大、「普遍的で多様な主体形成（人間発達）を考える」方法論の鍛練。

高い山を作るには、広い裾野が必要。多様な領域への視野拡大＝研究の重要な基盤。

5) 共同研究者 & 調査対象者

a) 共同研究者：佟岩（技能実習生・残留日本人研究）、草京子（夜間中学研究）。

二人がいなければ、今の水準の研究は絶対に不可能。

b) 社会に関わるすべてのことは、調査対象者から学んだ。

数え切れないが、おそらくインタビューだけでも1000人、アンケートを含めると3000人？

②教育：元々の資質・能力の欠如。 ×：教育熱心。 ○：教育という行為への本質的な疑問。

北大教育学部進学。文類入学。社会学、特に学校・教育と無関係の社会学できるから。

2000年代、夜間中学研究着手の「難関」：学校・教師への疑問。草京子による偏見打破。

∴ 教育については、低評価。

BUT 元々の資質・能力に比較すれば、一定の(甘い)自己評価。

a) 多数の学生・院生がゼミ選択、「おもしろがってくれた」。

b) 卒論等、論文指導は(前述)、一定の満足。

BUT (前述) 講義には「大きな反省」、ゼミには「小さな反省」。

1) 講義。不十分。＝自身の学生時代の体験によって規定。

有意義だった学習：卒論＝5割、調査含むゼミ＝5割、講義＝ほぼ0割。

教師が一方的にしゃべる講義から得られる知的刺激：極めて限られたもの。

今もあながち間違っていないと思う。多人数の大規模クラスでは、なおさら。

2) BUT 自分の経験のみに頼り過ぎ。

過去と現在の学生の学習環境の相違を十分に考慮していなかった。

過去：多種多様な「課外活動」による社会的問題意識の形成。

ex) 自主ゼミ・勉強会（寮・シェアハウス・学生自治会・院生協議会等）。
社会運動（セツルメントの地域実践、学生運動・A A L A等の経験）
それをふまえて学部・ゼミを選択。

現在：大多数の学生には、そうした環境なし。

インターネットの中に膨大な情報。

BUT 自分自身が実際の社会の中でリアルに理不尽を実感したり、どう対処するのか人格
を問われる決断を求められるような経験は少ないのでは？

学習環境の変化：学生の自己責任ではない。

社会的な問題意識の涵養に、もっと工夫・努力すべきではなかったか。反省。

3) 「ゼミぐるみ」での社会調査が、あまりできず。

自身の学生時代：「ゼミぐるみ」の多種多様なゼミ調査に参加。
＝社会認識深化・問題意識形成の基盤。

神戸大学、卒論・修論等の調査：できるだけ他の学生・院生も参加を促す。

BUT a) メインの調査対象が外国人・日本語不自由。→調査員も留学生が中心。

日本人学生に十分な機会を作れず。

b) 教員・学生とも、調査にかかる経済的・時間的な余裕なし。

V. 今後の「展望（夢）」（おそらく偶然の出会いでどんどん変わるが、現時点で・・・）

①研究：1) 残留日本人研究の総括。書籍刊行。（既発表のデータは約3割。約7割が未発表）

2) 夜間中学に関する史料集刊行。

全国夜間中学校研究会の史料保存委員会の仲間と。

全国夜間中学校研究会の創立70周年記念事業、2024年の刊行を目指す。

鋭意、作業中だが前途遼遠。

3) マルクス研究。もう一度、『全集』を読む。自分なりの総括。

目標：ポストコロニアルの多様なサバルタンによる脱領域的でグローバルな協働(地域社会)の形成で、人類は近代(国籍、階級、能力の壁)を克服できるのか？、

Vs 先端科学技術(ヒトゲノム操作、AI等)により、近代(国籍、階級、能力の壁)が飛躍的に強化され、結果的に人類は滅亡(ポスト・ホモサピエンスへの「進化」)の道を主体的に選ぶのか？

Or 第三の道はあり得るのか？を見定める。

②教育：摂南大学にて

1) 「反省」を生かした教育。

a) 実際の地域・社会の中で「問題意識」を培う。

- ・必修として、フィールドに出て社会調査または多様な社会的実践を経験。
 - ・既存の社会を「自明／所与」ではなく、「不思議（問題意識）／変革の対象」と認識。
- b) 「社会学的想像力」（ミルズ、個人と社会を往還する能力）の鍛錬。
- ・個々人の問題を社会全体の問題として構造的に理解（自己責任論ではなく）、
 - ・社会全体の問題を個々人の問題（自分事）として。
- c) 多人数クラスを含め、すべての授業を学生の議論中心に。

個々の教員の自己努力に委ねるのではなく、それができる教育体制の構築。

2) 担当する授業科目：

- a) 社会構造変動史：ホモ・サピエンスの史的唯物論。人類社会の生成－変遷－現在－未来。
 - b) 日本社会変動史：「日本／日本人」の生成－変遷－現在－未来。
 - c) 人間環境の社会学：「自然－社会」を包括する主体形成－環境形成の論理。
- できれば、いずれも平易な教科書を作成。

③実践（≡社会貢献）：大学の最大の「社会貢献」は研究と教育。

それとは別に「社会貢献」を評価項目にするのは反対。

BUT 研究者・大学教師としてではなく、一人の人間として大学とは無関係に実践したいこと。

1) 喫緊の課題：残留日本人二世の公的支援の実現。

全国的運動に協力。

究極的には、残留日本人問題のポストコロニアル的「和解」（日中露米）へと結実。

2) 夜間中学の法整備に伴う新たな矛盾深化。実践的展望の模索。

3) 労働者協同組合（ワーカーズ・コープ）への参加の模索（個人の勝手な「思い」・夢）。

a) 社会調査・政策形成のシンクタンクを事業所化できないか？

b) 大学院重点化政策の歪み、事実上の指導放棄に遭遇する院生が多数。深刻な問題に。

大学の枠を超えた研究・教育・実践を遂行する事業所はできないか？

4) 日本・東アジアにおける政治・社会の再構築の模索。何をなすべきか？

多謝！！！！。